

2005年の冬のパリ。グラン・パレで『メランコリア』の大展示が開かれる一方、エッフェル塔近くのパリ日本文化会館では『ヨーカイ』展が催された。二つの会場を前後して訪れて驚いた。パブロ・ピカソが水木しげるの目玉親父を作っていたのだ。一見そんな錯覚にさえ人を誘うのが、『刈り取る人』(1943)と題するプロンス作品。菓子型から鋳造を取ったという麦わら帽が、巨大な一目の眼窩のように、小さな頭を包んでいる。アンドレ・マルローはそこに死の使者を認めた。ドイツ占領下のパリの閉塞感が、ピカソの造形に影を落としたのだろうか。実際、手には大きな鎌を持ち、「時の神」クロノスの寓意を下敷きしている。刈り入れ時とすれば人々の命を奪い取る神格。占星術でいえば、土星・サトゥルヌスとも結びつく。だがそれは同時に、ローマの農耕神ヤヌスの面影もひきずり、山羊座と水瓶座にまたがって、冬と夏、過去と未来の双方に顔を向ける。詩人のアンリ・ミシヨンはかえってそこに、ピカソの立体造形のなかでも、飛びぬけて陽気な作品を見出そうとしていた。戒厳令下の暗鬱な日々なればこそ、立春の向日性への憧れが、双面神の姿に託された、とも言えようか。

幼少の水木しげるが、妖怪の存在に開眼したのも、日本が出口の見えない戦争へと突入してゆく時期のことだった。社会への不適応に由来する現実逃避願望と、弓ヶ浜の弧をなす砂地に展開する山陰の港町、境港のあけっぴろげな風光とそんな環境で培われた陽気な異界への憧れが、ラバウルで左腕を失って帰還した作者の「墓場の鬼太郎」の原点に潜んでいる。とすれば鬼太郎の父親たる目玉親父に、ピカソの双面神の面

連載 87
「めらんこりあ」と『ヨーカイ』

憂愁の病理とお化け屋敷の怪異に跨る想像界の動物誌

稲賀繁美
国原日本文化研究センター研究員・
総合研究大学院大学教員

影が宿ったとしても、不思議ではあるまい。それを無下に否定するのは、了見狭き合理主義の賢しら、妖怪学の提要に反する、狭き了見だろう。

古典ギリシア語の胆汁の黒に由来するメランコリアは、ヒポクラテス以来の伝統のなかで、人間の気質類型のひとつとなる。一方、エジプト起源の隠遁者に由来するアケティア(瞑想のうちに見える陰鬱な想念、あるいはその結果としての無気力、無関心、自己嫌悪、塞きこみ)は、やがて人間の想像力の魔として、キリスト教の八つの悪徳の六つ目に、精神の悪徳として位置づけられる。他方、ヘブライ起源の占星術がアラブ世界を媒介して西側世界に齎され、中世末期には、土星の微のもとに生まれた子供にメランコリアの特性を見出すようになる(『展覧会』、英語原本は絶版になって久しい、大著『土星とメランコリア』(晶文社、1991)の最後の生き残りの著者、レイモンド・クリバンスキー [1905-2005] に捧げられている)。ルネサンス期になると、マルシリーノ・フィッチーノの新プラトニズムの影響下にこれらの潮流が交響し、メランコリアは創造的個性を特徴付ける憂鬱感、厭世意識を説明する術語となる。この「聖なる病」は、「世紀病」、神経症や鬱病とも診断され、西欧精神史に脈々と受け継がれる。

『煉獄の誕生』とともに『幻想の中世』の心的表象に飛び交う魑魅魍魎。『ヨハネ黙示録』『聖アントニウスの誘惑』でお馴染みの、苦行の中に出現する幻影は、本邦でも無縁ではない。(『地獄草紙』や『六道絵巻』、『餓鬼草紙』や『土蜘蛛草紙』、さらけ下って江戸時代の『百鬼夜行絵巻』や『稲生物怪録草紙』)にも、メランコリア症候群の痕跡を認

めることはむずかしくない。合理的秩序や理性的な分類体系の綻び目からは、抑圧を掻い潜って、時に制御不能のイメージが噴出し、荒ぶる神のごとくあたりを跳梁する。それが「超常現象」などと名づけられる。

水木しげるの妖怪は、そうした系譜のなかでいかなる位置を占めるのだろうか。土星・サトゥルヌスは、我が子を食らう巨人として表される。近代の夜明けを告げるゴヤの絵もその一例だ。ところが目玉親父は、我が子を殺害するどころか、我が子、鬼太郎の眼窩に寄生し、息子の茶碗で行水に及び、西欧世界のオイディプス・コンプレックスを脱臼させる。愉快なことに、その鬼太郎が妖怪たちを背負って呻吟する肖像も展示されていた。税金、欲望、家族、病苦などが「擬人化」(?)された妖怪のなかで、一つ目小僧は「仕事」の寓意。流行漫画家として仕事の締め切り時刻(つまりサトゥルヌス)に追われていた頃の作者の境遇も透けて見える。

散文詩『パリの憂鬱』でボードレールは、メランコリアに取り憑かれ、噴火獣を重荷のように背負いながら、それと気づかぬ人間存在を描きだした。鬼太郎と目玉親父にあるのは、そんな憂愁の魔物を、哄笑とともに名指して憚らぬ闊達さ、反秩序の世界にこそ底抜けな楽天性の源泉を見出す精神の強靭さ、と云ってよいだろうか。セーヌ川を挟んで開催された二つの展覧会からは、そんな教訓も汲み取れる。

*Jean Clair(dir.)*Mélancolie, génie et folie en Occident*, R. MN, Gallimard, 2005-6.
Yōkai, Bestiaire du fantastique japonais, Maison de la culture du Japon, Paris, 2005-6.